

**研究拠点形成事業**  
**平成 26 年度 実施報告書**  
**A. 先端拠点形成型**

**1. 拠点機関**

日本側拠点機関：	京都大学 霊長類研究所
(ドイツ) 拠点機関：	マックスプランク進化人類学研究所
(イギリス) 拠点機関：	セントアンドリュース大学
(アメリカ) 拠点機関：	カリフォルニア工科大学

**2. 研究交流課題名**

(和文)： 心の起源を探る比較認知科学研究の国際連携拠点形成  
(交流分野：比較認知科学 )

(英文)： Comparative Cognitive Science Network for understanding the origins of human mind  
(交流分野：comparative cognitive science)

研究交流課題に係るホームページ：

<http://www.pri.kyoto-u.ac.jp/sections/ccsn/index.html>

**3. 採用期間**

平成 26 年 4 月 1 日～平成 31 年 3 月 31 日  
( 1 年度目)

**4. 実施体制**

**日本側実施組織**

拠点機関：京都大学 霊長類研究所

実施組織代表者 (所属部局・職・氏名)：京都大学霊長類研究所・所長・平井啓久

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：京都大学霊長類研究所・教授・松沢哲郎

協力機関：京都大学、神戸大学、東京大学

事務組織：京都大学

**相手国側実施組織** (拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。)

(1) 国名：ドイツ

拠点機関：(英文) Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology

(和文) マックスプランク進化人類学研究所

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：（英文） Department of Evolutionary Genetics,  
Director, Svante PÄÄBO

協力機関：（英文）

（和文）

経費負担区分（A型）：パターン 2

（2） 国名：イギリス

拠点機関：（英文） University of St. Andrews

（和文） セントアンドリュース大学

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：（英文） School of Psychology & Neuroscience,  
Professor, Andrew WHITEN

協力機関：（英文） University of Oxford, University of Kent, Cambridge University,  
Edinburgh University

（和文） オックスフォード大学、ケント大学、ケンブリッジ大学、エジンバラ  
大学

経費負担区分（A型）：パターン 2

（3） 国名：アメリカ

拠点機関：（英文） California Institute of Technology

（和文） カリフォルニア工科大学

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：（英文） Division of the Humanities and Social  
Sciences, Professor / Ralph ADOLPHS

協力機関：（英文） Harvard University, Duke University, Washington University in St.  
Louis, Lincoln Park Zoo, University of Georgia, Emory University

（和文） ハーバード大学、デューク大学、ワシントン大学セントルイス校、リ  
ンカーンパーク動物園、ジョージア大学、エモリー大学

経費負担区分（A型）：パターン 2

## 5. 研究交流目標

### 5-1. 全期間を通じた研究交流目標

人間を特徴づける認知機能とその発達的な変化の特性を知るうえで、「それらがどのように進化してきたか」という理解が必要不可欠である。本研究交流計画は、①人間にとって最も近縁なパン属 2 種（チンパンジーとボノボ）を研究対象に、②野外研究と実験研究を組み合わせ、③日独米英の先進 4 か国の国際連携拠点を構築することで、人間の認知機能の特徴を明らかにすることを目的とする。平成 22-24 年度採択の最先端研究基盤支援事業によって、京大の霊長類研究所と熊本サルクチュアリに、比較認知科学実験施設が整備された。その整備によって日本には皆無のボノボ（チンパンジーの同属別種）の 1 群を平成 25 年 10 月に北米から導入できることになった。そこで世界に類例のない新たな試みとして、

チンパンジーとボノボの双方を対象にした比較認知科学研究を国際的な連携のもとに推進したい。申請者らは、「進化の隣人」と呼べるチンパンジーを対象にした研究をおこなってきた。その過程で、チンパンジーには瞬間視記憶があることを発見した。一方、人間の言語につながる象徴の成立が彼らには困難なことを実証した。「想像するちから」と呼べる認知的基盤が、人間の本性だといえる。本研究交流計画では、日独米英の先進4か国による国際共同研究を醸成し、ヒト科3種の比較研究を通じて、「人間とは何か」という究極的な問いへの答えを探すことを目的とする。

## 5-2. 平成26年度研究交流目標

### <研究協力体制の構築>

ベトナムでおこなわれる国際霊長類学会の機会を利用して、各国の拠点機関および協力機関と研究協力体制の構築に向けた議論を開始する。

### <学術的観点>

ヒト科3種（ヒト・チンパンジー・ボノボ）を主な対象とした比較認知研究を推進する。国内に導入されたボノボの認知研究を国際連携によって発展させる。

### <若手研究者育成>

比較認知研究の基礎的手法である野外研究と実験研究の双方を実践形式で体系的に伝授するとともに、国際セミナーで英語による発表や議論への参加を促進する。

### <その他（社会貢献や独自の目的等）>

主にパン属2種を対象としたアフリカ等での野外研究についても、先進4か国で相互の連携を深めて共同研究を実施する体制を構築する。

## 6. 平成26年度研究交流成果

（交流を通じての相手国からの貢献及び相手国への貢献を含めてください。）

### 6-1 研究協力体制の構築状況

4月に日本で、野生チンパンジーの長期調査地の一つであるギニア共和国ボッソウでの国際共同研究に参加している研究者によるミーティングを開催した。本事業の開始をアナウンスし、今後の研究協力体制について議論をおこなった。8月にベトナムでおこなわれた国際霊長類学会と、その直前に日本で開催したサテライトワークショップでは、より広範な相手国参加研究者を対象として、今後の研究協力体制の形成および発展の可能性について議論をおこなった。また、コーディネーターの松沢が海外で成果発表の講演をおこなう機会等を利用して、相手国参加研究者との打ち合わせをおこなった。双方向の交流をおこなう中で、次年度以降の継続・発展が可能な研究協力体制を築くことができた。

## 6-2 学術面の成果

ヒト科3種（ヒト・チンパンジー・ボノボ）を主な対象とした比較認知研究を推進した。とくに、新たに国内に導入されたボノボを対象として、同施設にくらすチンパンジーとの直接比較研究を開始することができた。ドイツのマックスプランク進化人類学研究所で、アイトラッカー（視線検出器）等を用いて大型類人猿4種の比較研究をおこなった経験をもつ日本側参加研究者（狩野文浩）が帰国して、国内に導入されたボノボの認知研究を本格的に開始した。また、ヒト科3種の外群であるその他の霊長類および、霊長類の外群としての哺乳類を対象とした比較認知科学研究を国際的に推進することができた。京都大学霊長類研究所でおこなわれている比較認知科学研究を端緒として、相手国の参加研究者との間で多様な視点から学術的成果をあげることができた。初年度であるため、英語学術論文の形になったものはまだないが、国際学会やシンポジウム、ワークショップなどの機会を利用して多くの成果発表をおこなった。

## 6-3 若手研究者育成

若手研究者による国際セミナーでの英語による発表や議論への参加を積極的に促した。4月におこなったセミナーでは、相手国参加研究者と日本側の若手研究者が情報交換や議論をおこなう場を提供することができた。7月に霊長類研究所の主催でおこなわれた日本動物心理学会第74回大会では、初の試みとしてすべての発表を英語でおこない、若手研究者が国際的な場で活躍できるように基礎的な英語での発表・討論能力を高める工夫をおこなった。8月の国際霊長類学会や国際セミナー、シンポジウムでも、日本の若手研究者が多数参加・発表し、相手国の若手研究者とも交流をもつ機会となった。アフリカのフィールドにおける野外研究の実践形式での伝授は、西アフリカでのエボラ出血熱の発生により本年度での実施は困難であったが、実験研究の手法については、相手国の研究者が来日して若手研究者と交流をもつ等、様々な面で進展が見られた。

## 6-4 その他（社会貢献や独自の目的等）

主にパン属2種を対象としたアフリカでの野外研究については、主要な活動先として見込んでいた西アフリカ・ギニア共和国でのエボラ出血熱の発生を受けて、実施が困難だった。ただし、トラップカメラによる野生チンパンジーの行動記録法や、現地助手からのメールによる現況報告体制など、新たな形式での野外研究の可能性が見えてきた。また、とくに日本が主導する形で、アフリカ霊長類学コンソーシアムが設立され、アフリカ地域との連携が深まっている。今後は、相手国となっている先進4か国の研究者間で相互の連携を深めて共同研究を実施する体制を構築する必要がある。

#### 6-5 今後の課題・問題点

エボラ出血熱が終息後、早期に西アフリカでの野外調査を再開し、相手国がもつ他調査地との国際連携研究をスタートさせる。また、本事業の成果による論文公表を推進する必要がある。

#### 6-6 本研究交流事業により発表された論文

平成26年度論文総数 0 本

相手国参加研究者との共著 0 本

(※ 「本事業名が明記されているもの」を計上・記入してください。)

(※ 詳細は別紙「論文リスト」に記入してください。)

## 7. 平成26年度研究交流実績状況

### 7-1 共同研究

整理番号	R-1	研究開始年度	平成 26 年度	研究終了年度	平成 30 年度
研究課題名	(和文) 野生のヒト科大型類人猿を対象とした野外研究 (英文) Field study on wild great apes				
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 松沢哲郎・京都大学霊長類研究所・教授 (英文) Tetsuro MATSUZAWA, Primate Research Institute of Kyoto University, Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・職	(英文) UK: Richard BYRNE, University of St. Andrews, Professor USA: Crickette SANZ, Washington University in St. Louis, Associate Professor				
参加者数	日本側参加者数	14 名			
	( ドイツ ) 側参加者数	1 名			
	( イギリス ) 側参加者数	9 名			
	( アメリカ ) 側参加者数	6 名			
26年度の研究 交流活動	<p>日本がもつ野生チンパンジーの長期調査地である西アフリカ・ギニア共和国・ボツソウにおける研究実施については、エボラ出血熱の発生のために、野外調査の実施が困難であった。そのため、ボツソウで研究をおこなってきた研究者が、日本がもつ他の調査地を訪問して比較をおこなう等の取り組みをおこなった。米国のもつ中央アフリカのグアロウゴの研究者と、今後の研究協力に向けた情報交換をおこなった。また、野生ボノボやその他の霊長類を対象とした野外研究への参与と研究協力もおこなった。</p>				
26年度の研究 交流活動から得 られた成果	<p>複数の地域における野外研究の成果に関する情報交換から、野生チンパンジーの行動に亜種の違いや生息地の違いが反映されている可能性が示唆された。また、チンパンジーでは豊富に見られる道具使用が、野生ボノボで見られない理由についても、同じ研究者が異なる調査地を訪れて直接比較をすることで解明への端緒をつかむことができた。相手国でも過去の調査に取り入れてきたトラップカメラによる野生チンパンジーの情報収集を、エボラ出血熱による研究中断を補うための手段として利用し、現地助手とメールによる情報交換をすることで調査地を運営するという新たな形式を試行しており、本事業での研究者交流を通じて、このような手法が他地域でも応用できる可能性も示唆された。</p>				

整理番号	R-2	研究開始年度	平成 26 年度	研究終了年度	平成 30 年度
研究課題名	(和文) 飼育下のヒト科大型類人猿を対象とした実験研究				
	(英文) Experimental research on captive great apes				
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 松沢哲郎・京都大学霊長類研究所・教授				
	(英文) Tetsuro MATSUZAWA, Primate Research Institute of Kyoto University, Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・職	(英文) Germany: Josep CALL, Max Planck Institute of Evolutionary Anthropology, Professor UK: Andrew WHITEN, University of St. Andrews, Professor				
参加者数	日本側参加者数	13 名			
	( ドイツ ) 側参加者数	6 名			
	( イギリス ) 側参加者数	7 名			
	( アメリカ ) 側参加者数	11 名			
26年度の研究 交流活動	平成25年から26年にかけて日本に導入されたボノボの実験研究を本格的に開始した。大型類人猿4種を対象とした実験研究を先行しておこなっているドイツのマックスプランク進化人類学研究所との研究交流を進め、霊長類研究所で学位をとり海外学振PDとしてドイツで研究をおこなった狩野文浩が、ボノボを導入した京都大学野生動物研究センター熊本サントチュアリに赴任し、両種の直接比較研究をおこなった。また、霊長類研究所で長年の実績がある自動実験装置等をアメリカのリンカーンパーク動物園をはじめとする海外の施設に導入するとともに、国際連携に基づいて馬にも適用種の範囲を広げて実施した。				
26年度の研究 交流活動から得 られた成果	日本で初のボノボを対象とした比較認知科学にかんする実験研究をスタートさせることができた。パン属2種(チンパンジーとボノボ)の直接比較認知科学研究から、顔の画像を見るパターン等で両種の違いが見られるという画期的な成果が得られつつある。今後、本年度で得られた知見をさらに追究することで、野生で見られる両種の行動の大きな違いが、どのような認知機能の差異から生みだされているのかを詳細に探ることができると期待される。ヒトにもっとも近縁なパン属2種を主な対象としてその認知を比較するだけでなく、さらにその他の霊長類や哺乳類にまで比較対象を拡大することで、「人間とは何か」という問いに対する答えを探る端緒をつかむことができたといえる。				

## 7-2 セミナー

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「西アフリカにおける野生チンパンジー研究」 (英文) JSPS Core-to-Core Program “Research of wild chimpanzees in West Africa”
開催期間	平成 26年 4月 15日 ~ 平成 26年 4月 21日(7日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) 犬山(霊長類研究所)、京都(京都大学) (英文) Inuyama (PRI), Kyoto (Kyoto University)
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 松沢哲郎・京都大学霊長類研究所・教授 (英文) Tetsuro MATSUZAWA, Primate Research Institute of Kyoto University, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外で開催の場合)	(英文)

### 参加者数

派遣先 派遣	セミナー開催国 ( 日本 )	
	A.	B.
日本 〈人／人日〉	A.	6/ 17
	B.	30
イギリス 〈人／人日〉	A.	5/ 50
	B.	0
アメリカ 〈人／人日〉	A.	1/ 9
	B.	
合計 〈人／人日〉	A.	12/ 76
	B.	30

A. 本事業参加者(参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者(参加研究者リスト以外の研究者等)

※日数は、出張期間(渡航日、帰国日を含めた期間)としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

セミナー開催の目的	主に西アフリカ・ギニア共和国・ボツワナ周辺でおこなっている野生チンパンジーの研究について情報交換をおこない、今後の国際共同研究の進め方について議論をおこなうことを目的とした。		
セミナーの成果	ボツワナ周辺でおこなわれている野生チンパンジーの長期調査における最新の研究成果を参加者で共有した。また、開催直前にギニア共和国国内にてエボラ出血熱が発生したため、現地に滞在していた研究者の退避等の方針や、当面の調査地運営の方法について、国際共同研究のコアメンバーが一堂に会して集中的に議論をおこなった。ヒトとチンパンジーが近接して生活しているという状況、および野外実験場における道具使用にかんする実験的観察といった、ボツワナの特殊性・学術的意義、およびその結果生み出される問題とその解決という多岐にわたる課題について、深く掘り下げて議論することができた。その際に、西アフリカのギニアビサウや東アフリカにおける調査地運営の手法の実際についても情報交換をおこない、国際連携による野外研究の進めかたについて検討をおこなった。		
セミナーの運営組織	運営代表者：松沢哲郎（京都大学霊長類研究所） 運営委員長：林美里（京都大学霊長類研究所） 運営委員：山越言（京都大学アジア・アフリカ地域研究科） 運営委員：森村成樹（京都大学野生動物研究センター）		
開催経費 分担内容 と金額	日本側	内容	金額
		国内旅費	1,010,210 円
		外国旅費(含日本側研究者招聘)	233,661 円
	その他経費	金額	26,573 円
	外国旅費等消費税	金額	37,386 円
		合計	1,307,830 円
	( イギリス・アメリカ ) 側	内容	国際航空運賃
	( ) 側	内容	

整理番号	S-2
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「国際連携による霊長類の比較認知科学研究」 (英文) JSPS Core-to-Core Program “Study of comparative cognitive science through international collaboration”
開催期間	日本：平成 26 年 8 月 5 日～平成 26 年 8 月 10 日 (6 日間) ベトナム：平成 26 年 8 月 11 日 ～平成 26 年 8 月 18 日 (8 日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) 犬山(霊長類研究所)、京都(京都大学) (英文) Inuyama (PRI), Kyoto (Kyoto University)
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 松沢哲郎・京都大学霊長類研究所・教授 (英文) Tetsuro MATSUZAWA, Primate Research Institute of Kyoto University, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外で開催の場合)	(英文) Richard BYRNE, University of St. Andrews, Professor

#### 参加者数

派遣先 派遣		セミナー開催国 (日本)	セミナー開催国 (ベトナム)
日本 〈人／人日〉	A.	2/ 10	17/ 126
	B.	2	
ドイツ 〈人／人日〉	A.	1/ 7	1/ 16
	B.		
イギリス 〈人／人日〉	A.	3/ 21	5/ 38
	B.		
アメリカ 〈人／人日〉	A.	4/ 31	4/ 32
	B.		
合計 〈人／人日〉	A.	10/ 69	27/ 212
	B.	2	0

A. 本事業参加者(参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者(参加研究者リスト以外の研究者等)

※日数は、出張期間(渡航日、帰国日を含めた期間)としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

セミナー開催の目的	ベトナム・ハノイでおこなわれる国際霊長類学会の機会を利用して、各国の研究者と今後の国際連携による比較認知科学研究の実施に向けた基盤づくりをおこなうことを目的とした。国際霊長類学会のサテライトとして日本でセミナーを開催し、チンパンジーをはじめとする野生霊長類の道具使用行動等の調査結果について意見交換をおこないながら、今後の研究展開の方向性について議論をおこなった。妙高のセミナーには、主に野外研究の研究者が参加し、続いておこなわれるベトナム国際霊長類学会では、各国の参加研究者がシンポジウム等で発表をおこなうとともに、当該分野での国際連携の可能性を探った。ハノイでのセミナーは実験研究も含めて、各自の研究分野でそれぞれが国際共同研究の基盤づくりを目指した。		
セミナーの成果	<p>日本でのセミナーでは、各相手国の参加研究者が遠隔地のヒュッテに滞在して生活をともにし、研究に関する議論に集中できる場を設けた。今後の国際共同研究を推進する基盤となる相互理解と信頼関係を築くことができた。参加者の多くが女性の若手研究者で、チンパンジー・オマキザルを対象とした道具使用行動に関連する比較認知科学研究をフィールドでおこなっている研究者が主体で、有意義な議論をおこなうことができた。</p> <p>ベトナム国際霊長類学会では、参加研究者の最新の研究成果を国際的に発信し、各個人が当該の研究分野で積極的に今後の共同研究の展開可能性を探った。アジアにすむ大型類人猿であるオランウータンについて、マレーシア・インドネシアでも国際共同研究を推進する方針がかたまった。アジアにすむそれ以外の霊長類を対象とした国際共同研究の開始にもつながった。</p>		
セミナーの運営組織	<p>運営代表者：松沢哲郎（京都大学霊長類研究所）</p> <p>運営委員長：林美里（京都大学霊長類研究所）</p>		
開催経費 分担内容 と金額	日本側	<p>内容 国内旅費</p> <p>外国旅費(含日本側研究者招聘)</p> <p>その他経費</p> <p>外国旅費等消費税</p>	<p>金額 1,148,856 円</p> <p>金額 2,967,664 円</p> <p>金額 88,733 円</p> <p>金額 237,413 円</p> <p>合計 4,442,666 円</p>
	(ドイツ・アメリカ)側	内容 国際航空運賃	
	(イギリス)側	内容 国際航空運賃	

7-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

所属・職名 派遣者名	派遣・受入先 (国・都市・機関)	派遣期間	用務・目的等
インド科学研究 所・教授・Raman SUKUMAR	日本・犬山・ 京都大学霊 長類研究所	平成 26 年 7 月	日本動物心理学会第 74 回大会にて、霊 長類の外群であるアジアゾウの知性に 関する研究発表および研究打ち合わせ
セントアンドリ ューズ大学・教 授・Vincent JANIK	日本・犬山・ 京都大学霊 長類研究所	平成 26 年 7 月	日本動物心理学会第 74 回大会にて、霊 長類の外群であるイルカの知性に関す る研究発表および研究打ち合わせ
京都大学野生動 物研究センタ ー・教授・平田 聡	イギリス・ロ ンドン・ロン ドン大学	平成 26 年 9 月	野生チンパンジーの道具使用に関する 研究発表および今後の国際共同研究実 施にかかる打ち合わせ
京都大学霊長類 研究所・助教・ 林美里	イギリス・ロ ンドン・ロン ドン大学	平成 26 年 9 月	野生チンパンジーの道具使用に関する 研究発表および今後の国際共同研究実 施にかかる打ち合わせ

## 8. 平成26年度研究交流実績総人数・人日数

### 8-1 相手国との交流実績

派遣先 派遣元	国名	日本	ドイツ	イギリス	アメリカ	ポルトガル (日本側参加研究者)	イタリア (日本側参加研究者)	ギニア (第三国)	ベトナム (第三国)	ウガンダ (第三国)	カンボジア (第三国)	合計
日本	1	( )	2/95 ( )	( )	( 1/61 )	1/4 ( )	1/5 ( )	( )	( )	( )	( )	4/104 ( 1/61 )
	2	( )	( )	3/15 ( )	1/2 ( 1/60 )	1/4 ( )	( )	1/37 ( )	8/63 ( 8/63 )	( )	( )	14/121 ( 10/123 )
	3	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	1/13 ( 2/28 )	( )	1/13 ( 2/28 )
	4	1/3 ( )	1/7 ( )	2/16 ( 1/8 )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	1/9 ( )	5/35 ( 1/8 )
	計	3/98 ( 0/0 )	4/22 ( 0/0 )	3/18 ( 3/128 )	2/8 ( 0/0 )	1/5 ( 0/0 )	1/37 ( 0/0 )	8/63 ( 8/63 )	1/13 ( 2/28 )	1/9 ( 0/0 )	1/9 ( 0/0 )	24/278 ( 14/111 )
ドイツ	1	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 ( 0/0 )
	2	1/7 ( 1/14 )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	1/7 ( 1/14 )
	3	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 ( 0/0 )
	4	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 ( 0/0 )
	計	1/7 ( 1/14 )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	1/7 ( 1/14 )
イギリス	1	5/50 ( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	5/50 ( 0/0 )
	2	6/32 ( 2/14 )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( 2/28 )	( )	( )	6/32 ( 5/42 )
	3	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 ( 0/0 )
	4	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 ( 0/0 )
	計	11/82 ( 2/14 )	0/0 ( 0/0 )	( )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 2/28 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	11/82 ( 8/42 )
アメリカ	1	1/5 ( 1/5 )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	1/5 ( 1/5 )
	2	7/40 ( 4/31 )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	7/40 ( 8/67 )
	3	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 ( 0/0 )
	4	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 ( 0/0 )
	計	8/45 ( 5/40 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	( )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	8/45 ( 14/78 )
ポルトガル (日本側参加研究者)	1	1/8 ( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	1/8 ( 0/0 )
	2	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 ( 0/0 )
	3	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 ( 0/0 )
	4	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 ( 0/0 )
	計	1/8 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	1/8 ( 0/0 )
オランダ (ドイツ側参加研究者)	1	1/28 ( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	1/28 ( 0/0 )
	2	1/14 ( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	1/14 ( 0/0 )
	3	1/32 ( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	1/32 ( 0/0 )
	4	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 ( 0/0 )
	計	3/74 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	3/74 ( 0/0 )
タイ(日本側参加研究者)	1	1/35 ( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	1/35 ( 0/0 )
	2	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 ( 0/0 )
	3	1/15 ( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	1/15 ( 0/0 )
	4	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 ( 0/0 )
	計	2/50 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	2/50 ( 0/0 )
ポーランド (ドイツ側参加研究者)	1	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 ( 0/0 )
	2	1/3 ( 1/13 )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	1/3 ( 1/13 )
	3	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 ( 0/0 )
	4	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 ( 0/0 )
	計	1/3 ( 1/13 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	1/3 ( 1/13 )
インド(日本側参加研究者)	1	1/11 ( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	1/11 ( 0/0 )
	2	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 ( 0/0 )
	3	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 ( 0/0 )
	4	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 ( 0/0 )
	計	1/11 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	1/11 ( 0/0 )
イタリア (日本側参加研究者)	1	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 ( 0/0 )
	2	1/7 ( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	1/8 ( )	( )	( )	2/15 ( 0/0 )
	3	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 ( 0/0 )
	4	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 ( 0/0 )
	計	1/7 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	1/8 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	2/15 ( 0/0 )
ブラジル (日本側参加研究者)	1	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 ( 0/0 )
	2	1/8 ( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	1/15 ( )	( )	( )	2/23 ( 0/0 )
	3	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 ( 0/0 )
	4	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 ( 0/0 )
	計	1/8 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	1/15 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	2/23 ( 0/0 )
フランス (ドイツ側参加研究者)	1	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 ( 0/0 )
	2	1/44 ( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	1/44 ( 0/0 )
	3	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 ( 0/0 )
	4	2/104 ( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	2/104 ( 0/0 )
	計	3/148 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	3/148 ( 0/0 )
スイス(ドイツ側参加研究者)	1	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 ( 0/0 )
	2	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 ( 0/0 )
	3	1/8 ( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	1/8 ( 0/0 )
	4	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	0/0 ( 0/0 )
	計	1/8 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	1/8 ( 0/0 )
合計	1	5/125 ( 1/9 )	2/95 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 1/61 )	1/4 ( 0/0 )	1/5 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	13/230 ( 2/70 )
	2	20/166 ( 8/72 )	0/0 ( 0/0 )	3/15 ( 0/0 )	1/2 ( 1/60 )	1/4 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	1/37 ( 0/0 )	10/26 ( 11/127 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	38/310 ( 26/228 )
	3	3/55 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	1/13 ( 2/28 )	0/0 ( 0/0 )	4/68 ( 2/28 )
	4	2/104 ( 0/0 )	1/3 ( 0/0 )	1/7 ( 0/0 )	2/16 ( 1/8 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	0/0 ( 0/0 )	1/9 ( 0/0 )	1/9 ( 0/0 )	7/138 ( 1/8 )
	計	34/451 ( 8/81 )	3/98 ( 0/0 )	4/22 ( 0/0 )	3/18 ( 3/128 )	2/8 ( 0/0 )	1/5 ( 0/0 )	1/37 ( 0/0 )	10/86 ( 11/127 )	1/13 ( 2/28 )	1/9 ( 0/0 )	60/747 ( 6/244 )

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流した人数・人日数を記載してください。(なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。)

※相手国側マッチングファンドなど、本事業経費によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。

### 8-2 国内での交流実績

	1	2	3	4	合計
	5/9 ( 3/11 )	2/10 ( 1/4 )	4/9 ( 1/3 )	1/4 ( 2/6 )	12/32 ( 7/24 )

## 9. 平成26年度経費使用総額

(単位 円)

	経費内訳	金額	備考
研究交流経費	国内旅費	5,409,872	
	外国旅費	9,613,789	
	謝金	0	
	備品・消耗品 購入費	0	
	その他の経費	196,012	
	外国旅費・謝 金等に係る消 費税	780,327	
	計	16,000,000	
業務委託手数料		1,600,000	
合 計		17,600,000	

## 10. 平成26年度相手国マッチングファンド使用額

相手国名	平成26年度使用額	
	現地通貨額[現地通貨単位]	日本円換算額
ドイツ	9,500 [ユーロ]	1,330,000 円相当
イギリス	14,000 [ポンド]	2,380,000 円相当
アメリカ	18,000 [ドル]	1,800,000 円相当

※交流実施期間中に、相手国が本事業のために使用したマッチングファンドの金額について、現地通貨での金額、及び日本円換算額を記入してください。